

推薦のことば

～総合診療医の立場から～

初期研修医向けの「内科」や「救急診療科」についての基本的な事項をまとめた本は多数出ている。確かに「内科」と「救急診療科」は基本的臨床能力の中でも中心となる部分である。しかし、この2科目だけでは明らかに不十分だ。「外科」「産婦人科」そして「精神科」もメジャー診療科であり、基本的臨床能力のコアな部分に入っているのだ。

数年前になるが、このことに関する認識が不十分であったために、初期臨床研修カリキュラムの中の「外科」「産婦人科」「精神科」が必修科目から選択必修科目とされた。ここで「外科」が外された根拠は、救急診療科での研修を行う中で、外科の基本的事項が取得されるはずだとした誤った考えであった。このことの合併症は大きかった。外科研修を必修としないプログラムが全国に増え、臨床医学のメジャーである「外科」を臨床体験する貴重な機会が、多くの研修医の学びから失われたことは大変残念であった。

ちなみに、私が所属する群星沖縄プロジェクト病院群では、すべての基幹病院で外科研修を必修科目のままにしておいた。我々は「外科」を初期研修に必須のメジャー診療科と常に認識していたからだ。そんな中、最近になって、外科研修の必要性が再認識されるようになった。2020年度の初期臨床研修以降は、外科研修が必修科目となり、全国の研修プログラムが本来行われるべき研修に戻ることになる。喜ばしいことだ。

このタイミングに合わせた形で、初期研修医のための基本的外科研修のスタンダードガイドとしてふさわしい本書が登場した。「外科」を研修する前に全国の研修医の皆さんにぜひ読んでいただきたい。本書を読むことで、外科研修で何を勉強すべきなのかが明らかになるのだ。それは外科に特異的な知識であり、併存疾患を多数抱える高齢の手術患者の周術期管理を安全に行うための基本であるが、それらを症例ベースで理解することができる。そしてもちろん、外科手術や外科的手技の基本的事項についても、わかりやすい図や写真を用いて解説されている。

内科系の診療科に将来進む予定の研修医にとっても、本書をガイドとすることによって、外科研修は貴重な機会となるだろう。腹痛を訴える患者さんなどの場合、外科的疾患が原因のことがあるが、そのような患者さんは最初は内科や救急診療科を受診することがほとんどなのだ。手術のタイミング、術前術後の管理、コンサルトの要領について熟知するためには、初期研修で外科を十分に研修することが将来にわたり役に立つであろう。

本書を手元に置きながら外科を研修することにより、わが国の初期研修医の外科研修が充実したものになると私は信じる。本書をたった一人でご執筆された山岸文範先生には心より敬服する。急性腹症疑いで外科医にコンサルトする際に、山岸先生先生がコンサルタントなら研修医はとて多くのことを勉強できるだろうと羨ましく思っていた。本書を読むことで、山岸式外科ベーシックスの学習機会がいよいよ全国の研修医に広がっていくのだ。これを実現してくれた羊土社の皆様方にも感謝を表したい。

2019年5月

群星沖縄臨床研修センター長
徳田安春